

日本の史料津波研究の展望

Review of studies on historical tsunamis in Japan

都司 嘉宣 [1]

Yoshinobu Tsuji [1]

[1] 東大地震研

[1] ERI, Univ. Tokyo

津波研究で武者の史料集が活用され始めたのは羽鳥（1977）の静岡県海岸での津波調査が最初であろう。この後、紀伊半島の海岸などで史料津波研究が進められた。電子計算機のシミュレーションによって津波を再現する試みは、相田（1977）の須崎湾の浸水計算によって始められた。その後、尾鷲、湯浅、あるいは大船渡湾など、比較的小地域の湾の市街地での津波の振る舞いが論じられるようになった。いっぽう、箕浦などによる湖底堆積物中の津波痕跡の検出や、仙台平野の堆積物中の慶長津波痕跡の検出などに新しい成果が挙がりつつある。

1950年代に完成した武者の史料集は、刊行後およそ20年以上、ほとんど活用されぬまま時が過ぎた。津波研究でこの史料集が緻密に読まれ、現地調査で照合するという形で活用され始めたのは羽鳥（1977）の静岡県海岸での津波調査が最初であろう。この調査研究以後、主として羽鳥によって紀伊半島、四国の海岸など次々に史料津波研究が進められた。

歴史上の津波事象を、電子計算機のシミュレーションによって再現する試みは、相田（1977）の土佐市宇佐湾、須崎湾の浸水計算によって始められた。その後、尾鷲、湯浅、あるいは大船渡湾など、比較的小地域の湾の市街地での津波の振る舞いが論じられるようになった。

1980年代に入って、一連の「新収日本地震史料」の刊行などによって、新しい情報を加えて過去の津波の史料による解明の事例は増加した。このころから、歴史史料に書かれたことを鵜呑みに信用するのではなく、その史料の成立の由来や信憑性に関する検証が次第に重視されるようになってきた。

四国を襲った南海地震を論じた徳島大の村上（1995）の成果や、島原大変（1792）による眉山の斜面崩壊に伴う有明海津波の調査（都司、1994）は、大部分が「新収日本地震史料」で新たに紹介された情報によっている。

史料の活用方法に関する新機軸を提案した例として岩崎（1991）の論文がある。彼は徳島県日和佐の津波浸水を受けた田の所在を記す文書から浸水域と標高を解明できることを指摘している。都司ら（1998）は、島原大変（1792）の有明海津波の島原半島内佐賀領の小地域の田の面積から津波浸水標高を推定した。

歴史津波のなかの遠地津波というのは例は少ないが、都司ら（1998）による元禄北米津波の同定がある。地質痕跡と史料との共同研究成果のひとつである。

このような史料を利用した津波研究とは別の研究の方向として、地質学的証拠から過去の津波を検証しようという試みがある。

琉球大の加藤（1987,1991）は、沖縄八重山諸島のあちこちに残る明和八重山津波（1771）による、津波石を調査している。

箕浦（Minoura et.al, 1991）などによって湖底堆積物中の津波痕跡の検出や、仙台平野の堆積物中の慶長津波痕跡の検出が、行われている。また北海道大学有珠火山観測所の西村（1994）は、噴火湾の海岸のあちこちに残る寛永駒ヶ岳噴火津波（1640）の堆積物を調査し、史料的には1点しか判明していないこの津波の分布の解明を試みている。

湖底堆積物のなかに過去の津波の痕跡を見いだす試みとして、高知大の岡村（1997）は須崎市の糺ヶ池の中に見いだした先史時代の南海地震津波の痕跡を複数個見いだした。

最近2, 3, 年のうちに歴史津波の研究対象を日本国内に限定することなく、海外の津波事例の研究も試みられ始めた。Imamura（1997）は、ギリシャやトルコで古代に起きた津波伝説の物的証拠を求めロードス島などの発掘を行っている。箕浦（1993）はGusiakovらと共同してカムチャッカ半島に襲った津波痕跡を検証した。